検証・浦和電車区事件の真実 No. 1

民主化闘争情報［号外］ 2008年3月26日 発行 日本鉄道労働組合連合会（JR連合）

第1回 事件の始まり

当該事件の被害者であるＹ氏は、1992 年４月にＪＲ東日本に入社したと同時に、ＪＲ東労組に加入した。川口駅に配属され駅勤務を経た後、翌年 2 月に東京車掌区へ転勤した。子供の頃から鉄道が好きで、ＪＲ東日本に入社し、さらに憧れていた乗務員になれたことを、本人も家族も喜んでいた。

川口駅、東京車掌区ともに、職場の組合活動は活発ではなく、Ｙ氏本人もほとんど活動には参加していなかった。だから、仕事でお世話になった他労組の先輩などからキャンプやスキーに誘われれば、特に気にもせず一緒に行っていた。たとえ後で組合役員がそれを知ったとしても、詰問されるなどということはなかった。

「浦和電車区」への転勤

ところが、2000 年 2 月に転勤になった浦和電車区は、ＪＲ東労組の活動が活発で、「ＪＲ東労組以外の組合員とは挨拶するな。一緒に行動するな。組合の命令には従え」などと組織の「規律」が厳しい職場だった。しかしＹ氏は、当然ながら「仕事さえしっかりやっていれば、誰とつき合おうと個人の自由だ」と思っていたので、前の職場の社員とも以前と同様のつき合いをしていた。だから 2000 年 11 月に前職場の東京車掌区時代の友人達（ＪＲ東労組組合員４名、グリーンユニオン（ＪＲ連合）組合員１名）とキャンプに行ったことが、まさか自分の人生を暗転させてしまうことになるとは夢にも思っていなかった。

ハガキ活動に対する疑問

当時、ＪＲ東労組東京地方本部青年部は、組織拡大の取り組みとして、「国労を辞めてＪＲ東労組に加入しよう」という内容のハガキを、同じ職場に働く国労組合員の自宅に送る運動を行っていた。2000 年 12 月初旬、Ｙ氏は浦和電車区分会の役員からこのハガキを書くよう言われたが、さすがにそれは会社の先輩に対して失礼だと思い、指示に従わなかった。

しばらく経った 12 月 21 日の乗務終了後、Ｙ氏は、職場の浦和電車区２階の通路で同じ職場の運転士でＪＲ東労組浦和電車区分会の執行委員を務めていた斉藤被告から、青年部の決定に従いハガキを書くよう求められたが、「国労組合員の中には先輩もいるし、自宅にハガキを出すことで家族まで巻き込むことになるから、そんなことはできない」と断り、「国労の人達にハガキを出す必要はないし、誰とつき合おうと自由だ。実際、グリーンユニオンの人達とキャンプに行ったことだってある」と、うっかり喋ってしまった。これが悲劇の始まりだったのである。（次号に続く）

事件当時の浦和電車区の労組構成（2000 年 12 月 1 日現在）

ＪＲ東労組（ＪＲ総連）：180 名、国労：52 名、建交労：2 名、管理職：2 名 ※ＪＲ連合組合員はいない